

最新事情

多種多様な選択肢を知ることが
自分で生き方を選べる。女性への成長の鍵

大阪成蹊女子高等学校

(大阪府大阪市)

大阪成蹊女子高等学校では、独自に設定した女性に特化したキャリア教育に取り組んでいる。大人になってからも、仕事や結婚、出産など、その都度「どうするか」を考えなければならぬ女子生徒たちに、在校中にできるだけ多くの選択肢を与え、考え選択する力を身に付けさせたいとの思いからだ。同校のキャリア教育について伺った。

さまざまな女性の生き方を
知り、考えを言語化する

大阪成蹊女子高等学校は2学科(普通科、美術科)8コースからなり、生徒数は1学年約500人。3年間の学びを通して、女性としてさまざまな選択肢を広げ、教育の目標の一つとしている。看護医療進学や幼児教育、スポーツや音楽、美術などのコースがあることから、ある程度、進む方向を思い描いて入学してくる生徒もいるが、多くは入学後に時間をかけて、どのような人生を歩んでいくかを具体的に考えていくことになる。そのきっかけづくりとしているのが、1年生の必修科目「キャリアデザインa」(週1コマ、通年)だ。

担当する仲本実華先生は、この科目の目的を

次のように説明する。

「女性の生き方や自分について考えること、社会を知ることなどをテーマにしています。女子校ならではの内容であり、この科目を通して自分自身がこれからのように生きていくかを自分で考えられるようになってほしいと考えています」。

内容は、自己分析や多種多様な女性の生き方の紹介、さまざまな雇用形態について、分岐点となるライフイベントごとの選択肢の例示など、卒業後の「自分の人生」を生き抜いていくために考えてほしいことを幅広く取り入れている。具体的な職業の紹介などはここでは行わない。それよりも、「まずは、世の中にはたくさん選択肢があることを知ってほしい」と仲本先生は言う。



(左から)1年生の「キャリアデザインa」を担当する仲本実華先生、総合キャリアコース3年生の「キャリアデザインγ」を担当する奥村和氣先生。同校の「キャリアデザイン」を担当する教員は、それぞれの専門科目を担当しながらキャリア教育科にも所属し、教員同士で学び合いながらプログラムの開発なども行っている

同じ敷地に大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学があり、連携した科目も



「選択肢が幾つもあると知らなければ、選ぶために考えることすらできませんから。そのため、できるだけ多数の例を示して『どう思う?』と尋ね、それに対する考えを言語化することを徹底しています。1年生では、まだグループでのディスカッションはせずに、一人一人が自分の考えを、具体的に書くように伝えています。そのステップが、やりたいことが生まれたときに、それをどのようにしてやっていくかを考える力になると考えています」。

考えを言語化する、これを繰り返すことで生徒一人一人の考えが明確になっていくのが感じられるそうだ。

この「キャリアデザインa」の中で、やがて社会に出るための基礎として全員で取り組んでいるのが秘書検定3級である。5月から学習を始め、11月の試験での合格を目指している。1学期は座学での説明だけでなく、お辞儀とあいさつ、エレベーターでの案内や名刺交換などの来客対応の一連の流れなどを実技を交えて行う。電話応対も、教員が用意したセリフを見ながら、ペアになってかける側と受ける側の練習をする。2学期になると、試験に向けてひたすら過去問題を解いていく。

「ビジネスの現場や上司との関係がなかなかイメージできず、状況理解が難しいようなので、秘書の働き方が分かるマンガなども紹介しています。学んでいくうちにだんだんと覚えていくため、授業内でプリントを返すときに、

しっかりと両手で受け渡しをする生徒も出てきます。他の科目と異なり秘書検定は、全員が高校でゼロからスタートするもの。合格が成功体験になることがとても重要で、その後のやる気やチャレンジ精神につながっていると思います(仲本先生)。

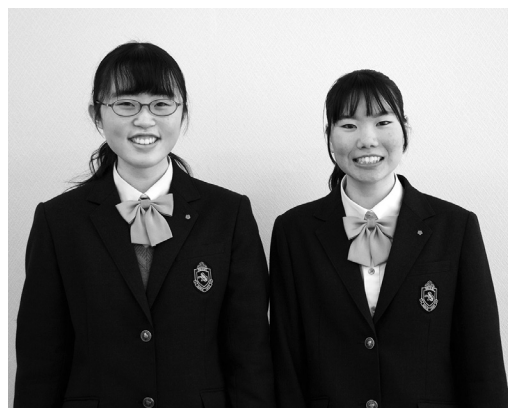
秘書検定で大人への一歩を知る

普通科総合キャリアコース1年生の井上桜華さん、普通科特進コース1年生の小西舞奈さんは「キャリアデザインa」で秘書検定3級を学び合格した。

井上さんは「知らなかったことばかりで、面白かったです。電話に出るとき、3回以上鳴ってしまったら『お待たせいたしました』とどうとか。自宅で電話に出ることがないので、勉強して初めて知りました」と笑顔を見せる。中でも難しかったのは席次の問題だ。

「どこが上座でどこが下座か、それぞれの場面で決まりがあることは知りませんでした。偉い人が奥というのはなんとなく分かっていたのですが、何人も人がいるときはどういう順番で座ってもらえばいいのか。場所と人との組み合わせで考えるのが難しかったです」。

小西さんは、「電話の受け答えの仕方や言葉遣いは就職したときに役立ちそうなので、もっと学びたいと思いました」と振り返る。小西さんが難しく感じたのは、アポイントメントの申



(左から)普通科特進コース1年生の小西舞奈さん、普通科総合キャリアコース1年生の井上桜華さん。「就職や出産などさまざまなことがあると思いますが、学んだマナーを生かしていきたいです(小西さん)、「勉強して、将来のことを考えるようになりました。就職に就くのもいいな」と思い始めたところです(井上さん)

し込みやスケジュール管理だ。

「場面がなかなか想像できないので、どのようにするのが正しいのか、理解しにくいところでした。また、上司が不在のときの電話や来客への対応も難しかったです」。

社会人がどのように働いているのかを目の当たりにする機会は少ない。大人はこのようにして働いているのかと、先取りするような気持ちで学んだのだろう。

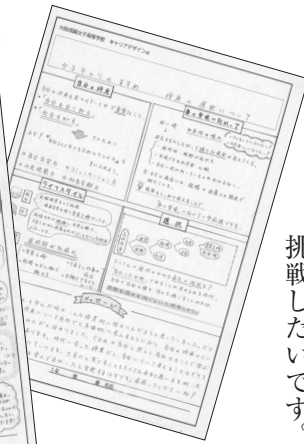
「ビジネスマナーは、知っていて損はないし、今勉強したおかげで恥ずかしい思いをしなくて済むと思います。部活で先輩と話すとき、敬語を正しく使うように心がけるようになります。特に二重敬語には気を付けています。2級になるとさらに知らないことばかりだと思いますが、それが面白いし、3級に合格したことで一人で勉強できる自信もつきました。在校

最新事情 55 大阪成蹊女子高等学校

「キャリアデザインa」のまとめレポート。次の1年生に向けてのメッセージも



1年生全員が必修の「キャリアデザインa」では、秘書検定で、社会で求められるマナーの基本を学ぶ。座学だけでなく、マナー・接客、技能領域についてはお辞儀や電話応対、案内などのロールプレイングも取り入れている



「一般的知識ではさまざまな用語も学んだので、ニュースを見たときに理解できることが増えました。特に円安・円高などの経済用語は最近よく聞くので、興味も出てきました。秘書検定では、社会に出てすぐに生かせることが学べると思います。大学を卒業するまでには1級にも挑戦したいです。まだどのような分野で働きたいか、具体的には決まっていませんが、ビジネスマナーは社会のさまざまな場面で役に立つと思います」(小西さん)。

中に2級にも合格したいです」(井上さん)。
「二級知識ではさまざまな用語も学んだので、ニュースを見たときに理解できることが増えました。特に円安・円高などの経済用語は最近よく聞くので、興味も出てきました。秘書検定では、社会に出てすぐに生かせることが学べると思います。大学を卒業するまでには1級にも挑戦したいです。まだどのような分野で働きたいか、具体的には決まっていませんが、ビジネスマナーは社会のさまざまな場面で役に立つと思います」(小西さん)。

正解がない問いに、答える力をつける

学年全員が同じ内容で取り組むキャリア教育プログラムは1年次のみ。2年次以降はコースごとに、職業体験や併設の大学・短期大学と連携した学びを行うことになる。

総合キャリアコース3年生の「キャリアデザインa」では企業探究のプログラムを取り入れている。企業そのものについて理解するだけでなく、そこで何が求められるのか、社会との関係はどのようなものか、そうしたテーマについて考えさせるものだ。幾つか有名企業が設定されており、「そこで働きたい」と希望する生徒が4、5人のチームで課題に取り組み。仲のよい友人同士のグループではなくするため、関係性は一歩大人に近づくという。

担当するのは奥村和気先生だ。「この科目に正解はありません。教材の説明動画でもそのことがはっきりと言われていますし、私も『アドバイスをすることはできませんが、答えを教えることはできません。自分たちでつくり上げたものが答えですよ』と繰り返し伝えていきます。最初は戸惑っていますが、調べ物や話し合いを繰り返すうちに、『これが今回の私たちの答えだ』と胸を張っていいんだと理解していくようです」。

正解がないのだから、ゼロから自分たちの答えをつくらなければならない。難しいが、だ



普通科総合キャリアコース3年生の「キャリアデザインy」では、企業で働く設定でディスカッションや課題解決学習を行う。タブレット端末や模造紙などを駆使して、生徒たちの話し合いが進む。教材の発行元や協力企業が視察に訪れることもあり、企業人と触れ合う機会にもなっている

からこそ楽しく、やりがいがあることを生徒たちは実感しているようだ」と奥村先生。そのためにも、この科目では、1年生では行わなかったディスカッションが中心になる。「3年生の1年間を通して、話し合いができるようになるのが分かります。1年生では、違う意見を言われたら戸惑ってしまうようなのですが、3年生になってしっかり話し合いができるようになる」と「どちらも正しい。ではどうしようか」と折り合いをつけられるようになる。その点での成長を感じています」(奥村先生)。

独自のプログラムで自ら考え、選択していく力の育成に取り組む同校。先生方の願いは、「自分がよいと思う道を、自分で選んでいける人になってほしい」。その思いに集約されている。